

薬剤師さんに聞く!  
私の「くすりのしおり®」活用法



## 薬剤師一人一人が主役

神奈川県を中心に15店舗を展開する望星薬局。

設立当初から患者さんとのコミュニケーションを大切にしたい取組を行ってきました。

現在も進化を続ける独自の総合処方監査システムを武器に、常に患者さんと向き合うその取組とポリシーについて、「くすりのしおり®」の使用状況も交えて伺いました。

望星薬局  
常務取締役

前田 正輝 先生  
Masaki Maeda



望星薬局  
医薬品情報室長

滝澤 健司 先生  
Kenji Takizawa



前田 ブースで対応すると言っても、1日100人以上の患者さんが来る中で1人の薬剤師が対応できるのはせいぜい20人程です。患者さん全員とコミュニケーションをとるべきではと考え、再度カウンターのスタイルへ戻り個別ブースを作りました(写真1)。早く薬をもらって帰りたい人もいれば、じっくり自分の悩みを聞いてもらいたい人もいます。様々なニーズを受け止められる仕組みを作ったのです。



写真1

### ガラス越しから個別ブースへ

——くすりを患者さんに適正に使用していただくために、望星薬局が取組んでいる患者さんと薬剤師とのコミュニケーションについて教えてください。

前田 今は薬剤師が患者さんとオープンカウンターでコミュニケーションをとることが普通ですが、30年程前は、調剤室が見えるようガラス張りにした中から薬剤師が対応していました。それを望星薬局を設立するときにFace to Faceで向き合えるオープンカウンターにしました。その後、横長のカウンターで患者さんと話をしているので、個人情報保護の観点から待合室にスペースを作り薬剤師が患者さんと1対1でコミュニケーションを図るようになった…これが「ラウンド薬剤師」でした。

——昨年、帝京平成大学の井手口先生とお話した際にも、「ラウンド薬剤師」についてお聞かせいただきました(Vol.23, No.4参照)。

### 患者情報・処方内容・医薬品情報をチェックする「総合処方監査システム」

——次に、望星薬局の全店舗で使用している薬剤情報提供文書(以下、薬情書)について教えてください。

前田 望星薬局では、一つ一つの薬袋の裏面にくすりの情報を記載したものと、処方されたくすりの一覧表を用意しています。薬袋は必ず渡しますが、一覧表は希望する方にお渡ししています。

昔の薬袋はくすりの名前と飲み方が書いてあるだけでした。そこに、飲む方法や注意すべき点などを加えていった結果こうなりました。汎用性は非常に高く、今は長期処方が多くありますが、薬袋の大きさが変わるだけなので非常に使い勝手の良い方法です。

——望星薬局ではほかにも、コンピュータによる服薬指導支援システムで総合的なケアがとても充実していると聞きました。

前田 薬局・薬剤師の重要な仕事のひとつが処方チェックです。当時既に1万数千種類の医療用医薬品がある中で、それらの相互作用や患者さんの疾患とのチェック方法について悩み、コンピュータを使おうと考えたのがシステム開発の発端でした。

薬物相互作用では、添付文書は網羅的なのでチェックをかけても8割～9割がひっかかってしまう。そこで、「禁忌」や「注意」、さまざまな表現方法をレベル分けし、ランクで区切り、われわれ薬剤師の判断材料となるようなものを作りました。

滝澤 今は処方システムに入力すると処方監査がかかります。患者情報、処方内容、医薬品情報のすべてをチェックするので、総合処方監査システムと呼んでいます。

## 現場で多様に使われる「くすりのしおり®」

——当協議会の「くすりのしおり®」について質問させていただきます。実は、望星薬局を利用した方からお聞きしたのですが、くすりの細かい情報が書かれた書類を要望したところ、薬剤師さんが「くすりのしおり」を印刷して渡してくれたそうです。

このように「くすりのしおり」を患者さんから求められた場合、どのように対応していますか？

滝澤 上記のようなケースのほか、薬情書だけでは説明が足りない場合、薬剤師の判断で信頼のおける情報として使うことがあります。やはり薬袋の情報だけでは網羅できていないため、例えば飲み忘れたときにどうすればいいかを、「くすりのしおり」を用いて指導したりします。

また、「くすりのしおり」は情報をコンパクトに纏めていながら必要な部分は押さえてあるので、薬剤師自身が参考にすることがあります。

さらに、新薬で製薬会社が作成する冊子がないときや、すぐに手に入らないときにも活用しています。

望星薬局の全店舗の端末はインターネットに繋がっており、必要なときには検索して印刷できる環境です。毎日ではないですが、提供する機会がありますね。

——「注射版くすりのしおり®」についてはいかがでしょうか。

前田 自己注射をされる疾患の場合は使用します。注射剤は外来や在宅でも当然使っていますが、点滴や注射をされている方などは、ご自身よりもどちらかという医療側が把握している部分が非常に大きいです。

——「くすりのしおり®」の更なる活用について、お考えがあれば教えてください。

前田 望星薬局では患者さんとのコミュニケーションの点で、お薬手帳の電子化を進めています。東日本大震災をきっかけに、薬局が機能しなくなったときのために個人の携帯にデータを保管できるようにしました。実際には、望星薬局の店頭で小さなサブディスプレイにQRコードを表示し、携帯に読み込んでもらいます(写真2・3)。するとその日の情報が取り込まれます。

将来的な希望としては、さらにクリックすることで必要な医薬品などの情報、例えば公的な情報や「くすりのしおり」が、リアルタイムで表示できるよう使えると思います。

現在、くすりを待っている間に実験的に患者さんにiPadで副作用を自己チェックしてもらっています。まだ1疾患しか対応していませんが、入力した情報はシステムにリアルタイムで入り、それをもとにくすりの説明をしています。

患者さんに毎回同じ説明をするのではなく、状況に応じて「その方に必要なもの」を提供する。さらには自分で必要な情報を取ってもらう方法など、多機能で多様性のある情報提供をめざしています。そうしないとくすりの情報を見なくなってしまうのです。

——最後に、読者の皆さまへのメッセージをお願いします。

前田 「医薬品に関しては薬剤師が主役」という気概を、薬剤師一人一人が持たなければと思います。常に患者さんと向き合って、自分の思いだけではなく双方向で現実的な結果を出していくことが大切です。

滝澤 望星薬局のシステムはしっかりしています。しかし一歩先に行くためには、やはり最終的には薬剤師の力です。薬剤師は様々な診療科の処方をすべて理解しなければなりませんが、それはなかなか難しい。病院だけでなく調剤薬局でも、領域ごとの専門薬剤師を置くような形に変わっていきたいと考えています。



写真2

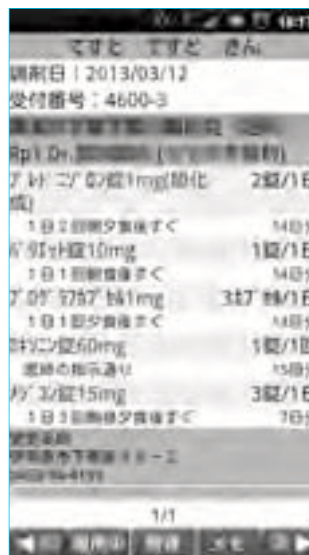


写真3